

M・ウェーバーにおける芸術と合理性

大 塚 晴 郎

要 旨

M・ウェーバーは社会科学のみならず芸術にも造詣が深く、「音楽社会学」のほか、諸論文の中で芸術について論述している。彼は芸術に関しても合理的側面を重視し、他の社会、文化の諸領域同様、西洋の普遍的合理化の中で問題としている。芸術の合理性は当然宗教など現世における他の諸価値との緊張関係を生起するとともに、芸術内部においても緊張関係を生じる。また芸術における抽象的、マクロ的価値の緊張は、具体的、ミクロ的に芸術の担い手である芸術家に影響を与える。以上を芸術社会学的視点から考える。

1. ウェーバーと、その芸術的環境

社会科学の第一人者M・ウェーバーは、芸術に関しても造詣が深く、しばしば諸論文の中で芸術について論述している。代表的なものに「音楽社会学」がある。彼の没後、未完成の草稿のままで発見されたものである。しかしこの「音楽社会学」は、音楽理論および作曲学に跨る専門度の高いもので、音楽的教養の一般的水準が高かった当時のドイツにおいても、その見識の広さが話題になっている。

彼は九才の頃にピアノを練習していたと伝えられ、またベルリン時代(1884年～1894年)には、盛んに演奏会に通っていたと言われる。また1907年前後彼の家には学者、哲学者、芸術家が集まりサロンを形成していた。彼はピアニストなどとの交流も深かったと言われる。また1911年から12年にかけてヨーロッパ各地を旅行し、その旅行の中で、音楽をはじめ絵画、彫刻などに深い関心を示し、いずれはすべての芸術を包括する社会学を書きたいという意向をもらしていたとも言われている。「音楽社会学」の研究内容の深さは、社会学的な分

析力に加えて、彼の生活の中に音楽、芸術が深くかかわっていたことは無視できない。「音楽社会学」以外にも、「宗教社会学論集序言」、「世界宗教の経済倫理—中間報告」、「宗教社会学」、「職業としての学問」、「プロテスタンティズムと資本主義の精神」などに芸術に関する考察が見られる。本論ではこうした諸論文を通じて、彼が芸術をどのように捉え、そこに何を求めていたかを考えてみることにしたい。それは芸術社会学の視点からも興味のあるところである。

2. 芸術におけるロゴスの合理性と、技術の合理性

ウェーバーが芸術そのものに言及しているもののひとつに「職業としての学問」がある。そのなかで彼は学問と芸術を対比している。即ち学者の仕事は芸術家のそれと全く違った運命のもとにおかれている。学問は常に進歩すべく運命づけられているが、同様の意味での進歩は芸術にはみられない。ある時代の芸術品が新しい技術上の手段や、またたとえば遠近法のようなものを用いているからといって、こうした手段や方法の知識を欠く作品にくらべてそれが芸術としてすぐれていると思うのは間違いである。正しく材料を選び、正しい手法に従っているものでありさえすれば、こうした新しい手段や方法を用いなくても、また主題の選択と制作の手続きにおいて芸術の本道をいくものでありさえすれば、それは芸術としての価値において少しも劣るものではない。これらの点で真に「達成」している芸術品は、決して他に取って変わられたり、時代遅れになったりするものではない。(前掲書 尾高邦雄訳「職業としての学問」 29頁 岩波書店刊)

ここに見られるウェーバーの芸術に対する考え方のなかには、作品の評価の相対性がみられ、芸術の創作の自由性が伺えるが、しかし反面それは正しい材料、正しい手法が用いられている範囲においてであり、さらに主題の選択と、制作の手続きが問題になっている。つまりここでは固有の法則が重視され、その意味において合理的であるということが出来る。そこにある彼の考えはアカデミー的であり、フランス王立絵画彫刻アカデミーの設立の考えのなかに見られる「ある生徒に対しては実践面に関し、権威によって証明された確実な規則を教え、生徒を過誤から守ろうとした思想」(当津武彦編「美の変貌」 128頁

世界思想社刊)と共通した部分を見ることができる。

こうしたウェーバーの芸術に対する考えを知るためには、ウェーバー夫人がテーオドル・クロイヤとこの草稿を整理し、「音楽社会学」と題し、副題に「音楽の合理的社会学的考察」と付した点が重要である。また「音楽社会学」の編集の際の「経済と社会」の第二版への彼女の序文に「音楽社会学の論文は、著者が企画していた芸術社会学のための最初の礎石をなすものである。はじめオリエントと西欧の音楽形象を探究していたときに著者の心を捉えて離さなかったことは、次のようなことを発見したことであった。すなわち、もっとも純粹に感覚に根差していると思われがちな芸術たる音楽においても、そしてまたほかならぬその音楽においてこそ、理性が極めて重要な役割を演じているということであり、また西欧における音楽の特性は、科学や政治的、社会的諸制度の特性と全く同様に特殊な性質の合理主義によって規定されているという事実」(前掲書 マリアンネ・ウェーバー序 安藤英治解説 259頁)とある。

ウェーバーによれば「音の理性は、音楽的表現手段の生きた動きというものをどんなに僅かしか捉えることができないとしても、実際には何らかの形で形成的原理としていたるところで作用している」(前掲書 安藤英明他訳 203頁)としている。彼にとっては芸術においてもこの理性的部分が重要であり、彼の研究目的と関係する。事実彼の「音楽社会学」における前半の主要テーマは音組織の合理化そのものをめぐる問題であり、さらに歴史的に近代音楽が和声的に合理化されている姿の紹介にある。この問題はいささか音楽的に専門的になるので、まずウェーバー自身による「音楽社会学」の要約ともみえる「宗教社会学論集 序言」の一節を紹介しよう。「音楽を聴き分ける耳は、今日のわれわれヨーロッパ人よりも他の諸民族の方がむしろずっと見事に発達していたようであり、とにかくわれわれ以下ということはなかった。さらに種々の多声音楽は広く世界中に広がっていたし、多数の楽器の合奏とかディスクアント唱法さえ西洋以外の地域にもあった。しかし合理的な和声音楽——対位法ならびに和音和声法——、すなわち和声の三度による三つの三和音を基礎とした音素材の構成、またルネッサンス以来間隔的にではなく合理的な形で和声的に解釈されてきた半音階法と異名同音法、絃楽四重奏を中核とした管絃楽器のアンサンブル組織をもつ管絃楽や、記譜法、ソナタ、シンフォニー、オペラそしてそれら

の手段として用いられるオルガン、ピアノ、ヴァイオリンなどすべての基本楽器、そういったものはすべては西洋にしか存在しなかった」(同書 大塚久雄 生松敬三訳 7頁 みすず書房刊)としている。

この点をさらに深く究明するためには「音楽社会学」そのものによらねばならないが、余りに音楽的に専門的過ぎて、かえってその面に拘束され、本来の社会学的な視点を見失う危険性もある。従ってここでは「音楽社会学」を巧みに分析しながら、しかも余り音楽的にならず、社会学的視点を重視しているR・コリンズの「マックス・ウェーバーを解く」(同書 寺田篤弘 中西茂行訳 107頁 新泉社刊)を参考に検討することにしたい。

彼は、ウェーバーが近代西洋音楽を考察するに際して二つの主要要素を指摘しているとしている。それは第1に音階であり、第2に多声性である。まず音階であるが、自然が提供する音そのままを用いて和声を作られているのではない。一オクターブを一二の音に分化してはじめて音を使うことができるのである。しかしこれを我々は自然のように思っているが、実際には一オクターブの分け方はいろいろある。インド音楽はオクターブに対して二二の平均律音を規定しているし、アラブ音楽は一七の平均律音からなっている、古代ギリシャや中国では「五音音階」であり、しかもその五つの音から、一オクターブは構成されない。それでは一二音階のなにが合理的か。これらの一二音が音楽的なハーモニーにとって重要なのである。オクターブは、人間の耳が誰でも高音のCを中音のCや低音のCと同じように聞くという意味において自然なのである。次のオクターブに下げたり、あるいは上げたりすれば、旋律を繰り返すことができるのである。オクターブは離れていても、音はお互いに調和している。

こうした質を多少持っている別の音程がいくつかある。たとえばいわゆる4番目(C音階のF)と、5番目(C音階のG)である。和音はこうした音から構成することができる。(特に3度目の音を加えることによって、C和音C-E-G、F和音F-A-CとG和音G-B-Dを得られる)。しかしこれは音の間隔が、こうした和声的和音にとって適切な形でオクターブが分けられているかどうかによって左右される。CとFとの関係とCとGとの関係は、いわば自然であるといえる。しかし完全な和音を作るためにはD、E、A、とBとをどこに置くかを決めねばならない。その上これが一定のやり方で行われるならば、音

楽家は和音を循環させることによって転調することができるのである。

G和音は（特に属7和音の音が加わるとき、すなわちG-B-D-F）C和音に解決する傾向がある。ある音の組み合わせが他の音の組み合わせに伴われて来るのが耳に自然であると感じるからである。しかしD-7の和音はGに解決し、A-7番目の和音はDに解決するということになり、いずれの和音もさまざまな調を巡って発展し、ついには始まったところに戻るように転回するとしている。

近代西洋音楽を特徴づける第2の要素としてコリンズは多声性を上げている。しかし多声音楽自体は広く世界に広がっているとウェーバーが述べている（宗教社会学論集、序論）ので、むしろここでは和音と声性を掲げるべきではないかと判断する。大抵の古代音楽や非西洋の音楽は単一声をもっている。もし一つ以上の楽器があるなら、ユニゾンして絶えず同じ音を演奏し、一方別の楽器あるいは歌い手はその上に旋律を織りなすという形がとられる可能性はある。しかしさまざまな異なった音が、同時に進行し、それが独自の旋律をもち、また和声の原理によって旋律がお互いに関連をもつということは近代西洋音楽以外にはなかった。和音と声性は音楽演奏を組織的にする。先述の宗教社会学論集序言にみられる絃楽四重奏を中核とした管楽器のアンサンブル組織をもつ管弦楽や、通奏低音奏者（1600年ごろより1750年頃までにもっとも使用されたもので、上声部の旋律に対応して書かれた低音旋律上に、オルガニスト、ハーブシコード奏者などの鍵盤楽器者が、即興的に和音を奏していく）なども該当するのである。

ここで興味深いのは記譜法である。譜表は800年代にヨーロッパの修道院で発達したものであり、1100年代、中世盛期に時間の尺度が生まれている。一二音階も発達し、ついに、1500年までには「西洋」音楽のすべての要素が整えられた。記譜法の開発があったればこそ、複雑化した近代における音楽作品を創作することも、演奏することも、そして永続的に伝承することも可能になったとも言えるのである。音楽合理化における合理的記譜法の意味は、あたかも経済合理化における合理的簿記の意味に対応していると考えられているのである。またこの記譜法の発達による形式に従って書かれた音楽が、歴史上初めて作曲家を個人として認めるようにしたことである。つまり西洋音楽固有の「独創性」

が社会的に基礎づけられたことになるのである。

以上はウェーバーが「音楽社会学」の前半部分で試した音楽のロゴスの抽出と、そのロゴスの合理化という部分にあたる。つまり「合理的和声的な音楽」である、西洋近代音楽は「根音」と三つの正規の主和音とに関連して構成された「音階固有」（音列の統一性）から成立しているわけである。そこに「調性」の原理が作用しているという「音楽社会学」の最も抽象的な部分のウェーバーの視点を、コリンズの解説にしたがって追ったことになる。勿論先に述べたようにその研究は音楽的にも専門的で、この解説部分のみでは十分ではない点は認めねばならない。

以上いささか音楽に片寄りすぎたが、ウェーバーは他の芸術諸分野においても同様の傾向を指摘している。再び「宗教社会学論集 序論」に戻ろう。「中世西洋が創り出したように、推力を分散し任意の形のドームをつくるための手段として、またとりわけ壮大な記念建造物の構築原理や、彫刻や絵画をとりいれた様式の基礎として、ゴシック式のドームを合理的に利用するということは西洋以外では見られない。同様にまた、ルネサンス期の西洋でなしとげられたドームの問題の解決や、全芸術のあのような絵画ならば線および空間の遠近法の合理的な利用にみられる—「古典的」な合理化も西洋以外では見られないとしている（前掲書 8頁）。ここにはその背景としてキリスト教支配の中世をも通して生きてきたギリシャ美学の基本的な流れ、対象をはっきり認識する知的、合理的、現実的な精神、幾何学的な正確さが、ウェーバーの中に意識されていたと推察される。

先に「音楽社会学」の前半部分「音楽に関するロゴス」について触れたが、次に後半部分「楽器に関する歴史社会的考察」について眺めることにしたい。彼は技術の合理性として、楽器に関する合理化について考え、それを外からのものと、内からのものとに区別する。外からの合理化とは音楽的基盤以外からの観点による合理化をさす。古い吹管楽器は装飾的観点から穴を配分した。アラビアでは、人差指用の押さえ柱と薬指用の押さえ柱との空間を全く機械的、間隔的に分割化したために、和音和声の音楽からみれば非音楽的でその後の和声法への発展が疎外された。シナでは楽器の律管の長さが、古代ギリシャではキタラの絃の緊張が、アラビヤではラウテでの絃の長さが、西洋の修道院では

モノコルドでのそれが、協和音の物理的測定に役立った。しかしそれらの場合には楽器は結局耳に聞かれた音によって調律された。しかしこれでは和声法への発展と、純粋な全音階法への発展は停止することになるのである。こうしたハード面から問題をウェーバーは外からの合理化要因と考えている。これに対し内からの要因と考えるものは、ソフト面で「整律」の問題がある。音程相互間の矛盾を「平均化」することが整律の意味であるが、現実には種々の問題が音響物理学的にも想像される。ことの性質上この問題は当然鍵盤楽器の使用に結びついてくる。しかしバッハの平均律によって等分平均律が一応完成をみた。このことは和音が自由に進められる前提であって、異名同音の変換による転調の可能性もこれによってはじめて与えられたことになる。要するに近代の和音と和声的な音楽は「整律」によって始めて完全な自由が与えられたのである。最後にウェーバーは弦楽器、鍵盤楽器の発展の社会経済史的考察を行う。弦楽器の発達にとって決定的な木工技術との関係、初期、中世の修道院と近代的音感覚を育てるのに役だった楽器との関係、楽器の発達と市場問題、北欧の家中心の生活と、室内空間用楽器としてのピアノの関係など未完の草稿であった「音楽社会学」のなかには、今後の社会学的研究課題が宝石のように散りばめられている。

以上の分析から、ウェーバーは芸術の合理的側面を重視し、他の社会、文化の諸領域同様、西洋の普遍的合理化の中で芸術を問題視していたと考えられる。

3. ウェーバーにみる芸術の自立化と、それに伴う緊張

以上芸術に関する固有の法則性について、ロゴス面からと、実践面から捉えてきたが、こうした法則性に首尾一貫性を求めようとすれば、当然のことではあるが、芸術内部に緊張をもたらすことになる。もともと芸術自体が原始時代がら当時に至るまで決して自立したのではなく、宗教に包摂されてきたものであることは歴史的に明らかなことである。

ウェーバーはその著「宗教社会学」において、宗教と芸術の両者の間の根源的關係は、考えられる限り最も緊密なものであるとし、次のように述べている。「あらゆる種類の偶像や図像、忘我や悪魔祓いや厄除の祭儀行為の手段として

の音楽、また聖歌手や呪術師による音楽、さらには最大の芸術的構築物としての寺院や教会、工芸的作業の主要対象物たるあらゆる種類の祭壇用装飾品や教会什器類、こういったものすべてにおいて、宗教は芸術的展開の可能性を生む汲めども尽きせぬ源泉となっている」(前掲書 武藤一雄 蘭田宗人蘭田担訳「宗教社会学」300頁 創文社刊)。同様に音楽についても「非常に初期の発展段階では、未開音楽のかなり多くが純粋な美的享受とは縁遠く、実用的な目的に支配されていたということ。最初はとりわけ魔術的な目的、とくに除祓的(じょふつてき)(祭祀的)目的や、祓魔的(医術的)目的に支配されていたという事実である」(音楽社会学 前掲書 94頁 創文社刊)ことを指摘する。

そうして音楽の初期の発展段階では、ひとたび魔術的、実際の効果が確かめられると、どのような歌い方の変更も、その魔術的效果を台無しにするという意味から違反として処置されることになる。こうした状況では一度聖列に加えられた音程のステロ版化は、異常に強いものにならざるをえない。音程の固定化に寄与した楽器もまた、それぞれ神やデーモンに応じて分化され、その奉仕のため、あるいは対抗手段として使われ、諸音楽の類型化に貢献した。彼によればこの種の真に原始音楽は今日ほとんど伝えられていないとしている。

彼は前掲「宗教社会学」において、呪術・宗教的な原初的段階から、神観念の諸形態の生成、発展にいたる過程を描き、呪術と宗教の分離、倫理的な神や、宗教的倫理の成立を分析する。こうした宗教の合理化はやがて当然のことながら現世における諸価値と緊張関係をもたらす。芸術もまたその諸価値の一つとして宗教との関係においても緊張関係を生じるのである。彼によれば芸術と宗教の両者の関係は、一面において感動的体験という心理的親近性があるが、他面神秘的体験ということからいうと大きな違いがある。というのは神秘的体験は宗教的態度のうちでももっとも非合理的な形態であり、形を与えがたく、またいい表すことも不可能であり、形に対して敵対的な態度を取るからである。かくて芸術の宗教的救済意志との親和性は消滅し、逆に芸術自体における合理性の要求を誘発することにもなる。こうした芸術自体の合理性の要求と、生活諸領域における緊張関係が、芸術家に対してどのような影響を与えるのか。つまり芸術と他の諸価値とのマクロの緊張関係が、ミクロの芸術の担い手である芸術家にどのような影響を与えるのかという問題が生まれる。合理性を求める

という抽象的関係を、現実の個人—ある意味で非合理的側面を有する—が、日常的世界においてどう具現していくかという課題になる。

この点についてウェーバーはどのように考えていたのであろうか。彼は「職業としての学問」と関係し、芸術についても触れている。ここで彼が学問を志す人々に期待していることは、仕事への専心である。この点芸術家の場合も同様である。彼によれば学問でも芸術でも、その仕事に仕える人のみが「個性」を持つことができるのである（前掲書 尾高訳 28頁）。現世において人間は自己の売名に走ったり、経済的なものを求めがちであるが、それは結局自己の名を落とすことになる。反対に自己を減しておのれの課題に専心し、首尾一貫性を求めることが、ウェーバーの基程に流れる合理性であり、職業観でもある。しかし「審美的価値領域が確立され、ボヘミアンが典型的な形で実行したことによって完成された主観主義は、職業労働の「具現化された秩序（コスモス）」とは対局的世界をなしていた」ことになる。従って現実には岡倉天心が嘆いた「近代精神は、人間を解放しながら芸術家を追放した」という芸術的状况を招いたのである。その意味では芸術そのものの緊張関係が、ミクロの担い手の段階においてその生存条件ともからみ、より複雑な、しかもより深刻な緊張関係を生じたことになる。この点については別の機会に詳しく検討したい。

4. 結びにかえて——ウェーバーにみる近代合理性とその限界

（芸術を中心に）

以上ウェーバーにおける芸術を中心に、「合理化」ないしは「合理性」の問題を眺めてきたが、次のような点が指摘できるのではなかろうか。即ちウェーバー自身は合理化の問題を近代以降にみられる独特の現象としてではなく、古代社会、とくにユダヤ教や、ギリシャ精神を生んだ文化世界の成立以降、中世のキリスト教社会をへて近代にいたる世界史的な発展過程のなかで考えているということである。この点については「音楽社会学」や宗教に関連する諸研究においても見られたところである。しかし彼がその中で直接「合理化過程」を問題とし、明確な研究対象にしていたのが、「西欧近代における合理性」であることも言うまでもない。彼は西洋文化に特有の合理主義を科学、芸術、政治、

経済、法制などの諸領域に見いだし、自己の研究課題としてきたのである。

ところがこの研究の中心概念である「合理化」あるいは「合理性」の意味するところは必ずしも一様ではなく、実に多義的である。彼の「合理性」の概念がその後問題とされ、その解釈についても今日多くの研究者達によって論議されている。それはある意味でウェーバーの全著作を通じ、時間的経過の中で解釈すべきものである。ここではウェーバーにおける芸術との関わりにおいてのみ、合理性について考えてみることにしたい。

ウェーバーは「宗教社会学論集 序言」において、今日、われわれが「普遍妥当的だと認めるような発展段階にまで到達している科学なるものは、西洋にだけしかない」（同訳書 5頁）とし、「芸術においても、事情は似ている」とし、合理的な和声音楽は西洋固有のものとしている。こうした合理性は特定の実践的・合理的な生活態度をとりうるような人間の能力や素質にも依存するところが大きかったとしている。

また彼は合理性に関係する「現世拒否」について、次のようにのべている。「こうした図式の構成は、いわば座標軸設定のための理念型的な手段に過ぎず、独自の哲学をとくことを目的とするようなものではない」と断わり、「容易に分かるように、そうした諸類型にあっては、個々の価値領域は合理的な一貫した姿に作り上げられている。もちろん、現実にはそうした合理的な一貫したかたちで現れてくることはめったにないが、現れうることは確かだし、また現に歴史的に重要な意味をもつような仕方では現れている。」とし、理念型的なものであることを認めながら、しかも現実的、歴史的にも出現の可能性を否定していないところに特徴がある。ここでは一方において理念型としての「首尾一貫性」をもたしながら、他方において現実的緊張感のある概念として定義している。即ち「知的・理論的な場合であれ、あるいは実践的・倫理の場合であれ、ある立場を選択する際の論理的なあるいは目的論的な「首尾一貫性」という意味において合理的なものは、歴史的生の他の諸力に比べれば限られた、不確かなものであるとしても、これまた人間を支配する強い力をもっている（いや昔から持ってきた）ことは確かであろう」としている。そうして「現実がとりうる最も合理的な形態から出発して、一定の理論的に推理可能な合理的結末が現実のなかでどの程度まで実際に生じたか、そしてまた何故に生じなかった

のかということを探求しようとするのが狙いであると主張している。

結論的に言うならば、彼自身は芸術を決して理性でもってその形成的原理が全て解明できるものとは考えていない。しかし芸術の生きた動きそのものを僅かしか捉えることができないとしても、理性の作用が重要であると考えていた。芸術の中でもとくに音楽には理性が極めて重要な役割を演じており、とくに西洋音楽の特性はこの合理主義によって規定されていると考えている。そうして「音楽社会学」においては、彼の研究もまたこの一点に集約されている。芸術についてもかなりの分野にその関心を有し、事実それなりの調査も開始していたウェーバーが、この分野の研究の一番打者に音楽を選んだのもこうした主知主義的立場からである。

本論ではこうした理性的側面を有する芸術、とくに音楽における内的合理化の問題をまず考え、その合理化過程の結果、固有の法則性（一二音の組織と和音、そしてそれを表す記譜法の発展）が、今までの属人的な芸術から、標準的なものを生み出し、共有化されたシステムの形成に貢献したことを見てきた。

しかしここで注意すべき点は、この固有の法則が「形式合理性」を貫徹したところにあるということである。「形式合理性」を追求すればするほど、内的に緊張関係を生じる。したがってその内的合理化作用を中止しないかぎり、たえず緊張関係は継続するということである。ところがその内的合理化を中止し、その段階に留まるならば、その段階の形式性が制度化につながり、ステロ版化し自立性を失うことになる。従ってこの段階に留まらず、実質的価値に一層近づくための新しい作用が働き、創作的な力として稼働することが、次の発展につながるのである。つまりこうした確定した方法が確立したとき、そこに多くの変化を生む可能性の社会的基盤が完成し、複雑化した近代音楽が創作され、演奏され、そして後世に伝承することも可能になるのである。

そこでは新しい形の社会的創造物が生み出され、さらに合理化は内的に進めらる。その結果新たな緊張状態を生じるのであって、宿命的に合理化過程は緊張状態の継続となる。以上はあくまでも芸術あるいは音楽内部の合理化の問題である、しかし次の段階として芸術自体の合理化が、価値共同体の共同性を失うことになるのである。例えば音楽の場合に、同じ芸術ではあるが、文学、絵画、演劇といった他ジャンルの芸術との間に緊張関係が発生する。音楽は本来

「音」の共同体であり、その中の問題は先に見た内的な問題である、しかし「音楽」の解説や、批評が「文字」によってなされるということは、広い意味では「文学」との緊張関係を生み出す可能性が生まれる。さらに芸術ではなく、その音楽の歴史的な母体、例えば宗教や、他の価値領域との間にも緊張関係を生じることについては既に見てきたところである。

次にミクロの問題である芸術の担い手としての芸術家の問題になると問題は一層複雑になる。こうした芸術への首尾一貫性は、その担い手である芸術家に対して、職業への専心を要求するのであるが、現実の場においては別の緊張関係を生じる。ここでは主として芸術家の生活基盤との関係において経済的価値との関係があらたに発生する。その意味では芸術家による芸術に関する合理性の追求は、経済的自立性と関係する。

最後に二つの問題が残る。一つはウェーバー自身合理化の過程が首尾一貫貫徹されるものと過度の期待をしていたかということである。それはあくまでも彼にとって理念型であり、しかも現実的、歴史的場においての課題である。彼は合理化過程を分析するとともに、先に見たとおり何故に合理化が生起しなかったかということの探求の必要性を問うている。つまり彼の世界の中には合理化を拒否する非合理的部分を想定していたと考えられる。むしろ彼自身の研究理念のなかの理論的、実践的合理化追求の姿勢が、現実の非合理的性を浮き彫りにし、一面ではこれの合理化と格闘することになる。他の一つの問題は少なくとも「音楽社会学」においては、西洋の近代の合理化を評価しているが、芸術の合理性についても、官僚制にみるように「運命的力」として危機意識を有していたかということである。これは「音楽社会学」が未稿の状態にあったこととも関係し、彼の他の諸論文との関連のなかでさらに研究を要するところである。

[参考文献]

1. Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft, Religionssoziologie*, 1922. (武藤一雄 藺田宗人 藺田 担訳「宗教社会学」1976年 創文社刊)
2. Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie* 3 Bde. Vorbemerkung. (大塚久雄 生松敬三訳「宗教社会学論選」1972年 みすず書房刊)

3. Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehenden Soziologie, vierte, neuherausgegebene Auflage, berorgt von Johannes Winckelmann, 1956. Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik. (A) 安藤英治 池宮英才, 角倉一朗訳「音楽社会学」 S42年 創文社刊
(B) 山根銀二訳「音楽社会学」 S29年 有斐閣刊)
4. Max Weber, Wissenschaft als Beruf, 1919. (尾高邦雄訳「職業としての学問」 1993年 岩波書店刊)
5. R. Collings, Max Weber; A Skeleton Key. (寺田篤弘・中西茂行訳「マックス・ウェーバーを解く」 1988年 新泉社刊)
6. 倉橋重史著「社会学史点描」 1994年 晃洋書房刊
7. 浜井 修著「ウェーバーの社会哲学—価値・歴史・行為—」 1982年 東京大学出版会刊
8. 山之内靖著「マックス・ウェーバー入門」 1997年 岩波書店
9. 当津武彦編「美の変貌—西洋美学史の展望—」 1991年 世界思想社刊
(おおつかはるお 佛教大学大学院社会学研究科博士課程)